

当日配布資料

FDをどう組織するかー相互研修の共同体へ向けてー 実践報告を受けて「相互研修の立場から」のコメント

石 村 雅 雄（京都大学高等教育教授システム開発センター）

基本的問題意識

＊＊実際の三先生のご報告を聴く前に作らせていただいています。

今後のFD組織化のあり方

「そこで、最後に検討しておくべきは、以上の、日本におけるFDの状況において、本章で検討してきた検討会による教員相互研修の試みを如何に広げるか、組織するかという問題である。この3年間、われわれが行ってきた検討会は誰にでも行えるものではない。我々には、組織的な要請と田中教授のリーダーシップ、それに応えるスタッフチームの存在があった。では、こうした試みを、必要な条件を整備して、意識的に広げるべきなのであろうか。現在FDは文部省及び多数の社会的支持を得ており、大学の中にもそれに応えるべきとする少なくない「善意あふれる教員」（池野、1994）がいるという恵まれた条件にある。そして、わたしたちは、そのFDはこの試みのとおり、個々の教員の自省を中心として進められなければならない、との確信を持っている。では、この試みを、先の条件を生かして、躊躇無く組織化していけばよいのか。そうではないはずである*。「自省」を「組織化」という矛盾、もしくは、今流行の「自己啓発セミナー」に類似した感じ悪さがそこには付きまとう。また、この試みに参加した者の間では、相互に主観的にこの研修の意味を追求し、明らかにすることはできても、これをこの枠の外に問うことには、別の変換装置を必要とする。検討会参加者相互間での主観的な成果をそのまま外に投げ出しても何の意味もそこには見出せないのは明らかである。」

※もちろん、こうした組織化が可能な分野も存在するし、そうした経験があることも承知している。但し、それには、最初にFDありきではなく、それを支えるスタッフの存在、該当チーム内での合意、リーダーシップの存在等の前提が必要である。例えば鳥取大学工学部電機電子工学科では、公開講義の成果から、カリキュラムの見直し、授業実施体制の見直しにまで取り組んでいるが、これは、本章で指摘した参観者の参加資格に関わる点が同大学、同学科のスタッフに限定されているという点でこの試みとは別の性格をもつ。鳥取大学『わかりやすい講義をめざして～教授方法の調査・研究報告資料』1999年。

『大学授業のフィールドワーク』玉川大学出版部、平成12年中に刊行予定。

1 センターがしている検討会のFDとしての意味

公開実験授業は、授業そのものとその後の検討会という一連の活動を通じて、教授者と参観者、そして参観者相互の関係において、互いに自らが他者を活性化すると同時に自分も活性化されて変わる過程を、大学における相互研修として位置づける意欲的な試みでもあった。

日常性 暗黙の前提としている「常識」「知」の問い直し

公開実験授業の優位性…集团的検討

2 コメント

・FDの組織化を「いま」考えること

FDがたどってきた歴史

全く不可能で、大げさなFDではなく、日常的なFDが考えられる蓄積に依拠したFDへ
大学改革をめぐって繰り返されてきた多くの実践の総括的发展に依る新たなFDの段階へ

・FDの内容

doの部分の改善としてのFD

技術主義的FDの限界

教育課程（plan）－教授法（do）－教育評価（see）のサイクル全体を内部から組織的に自己生成していく営み、そのものがFD

・FDを組織化するレベル

大学（正確には個々の教育・研究のフィールド）とそれを管理する機構という2つの装置がそれぞれに存在する問題。求められているFD像も大きく言って2つあり、管理する側に取り込まれる形での中間型として3つとも言える。

ミクロレベルでの循環を上位にあげていく時の「当事者意識」の喪失

巨大かつ複雑な管理運営システムへの諦観

・FDからSDへ 誰がFDに参加するのか

教授団、教育一般、若手教員、事務職員、大学補佐職、学生…

・FDをマネジメントしていくこと

比較相対化法、システム化法、ミクロ沈潜化法

3 まとめにかえて

第三者評価機関、独立行政法人化のもとでのFD

～FDはしなければいけない、しかし…

「気持ちよく寝ている人」をどうするのか。FD研究、FD実践に同時に携わるわたしたちは、最後まで踏みとどまって、ともに沈没するのか…